

薬師寺食堂の調査

—第500次

1 はじめに

今回の調査は、法相宗大本山薬師寺が進めている薬師寺旧境内保存整備計画にもとづいた食堂再建事業にもなうものである。食堂は、薬師寺と近畿大学が中心となって結成された薬師寺伽藍発掘調査団や奈良文化財研究所が昭和44～49年度に4次にわたって、部分的な発掘調査をおこなっており、礎石抜取穴や地覆石、基壇周辺では雨落溝、石敷等が検出され、食堂の規模も復元されている（『薬師寺報告』）。

本調査ではこれらの成果をふまえ、基壇や建物の正確な規模や位置、基壇外装の様相など、食堂の全容を解明すべく食堂全体を発掘調査対象とした。調査区は、東西50m、南北27mで、調査面積は1,350㎡。過去の調査区と一部重複するため、新規発掘部分は約950㎡となる。調査に際し、土置場を確保するため、東と西に分けて発掘した。また、食堂の周囲には電気・水道等の配管や現代の暗渠が埋設されていたため、調査区縁辺部では遺構面まで掘削できなかった部分がある。なお、今回の調査の概要は、『薬師寺—旧境内保存整備計画にもなう発掘調査概報Ⅰ—』（奈文研2013）として出版されている。本報告も、それと内容は同じだが、遺構番号の表記に関して本書との統一をはかるため、若干変更した。

2 薬師寺食堂の歴史

古代の食堂は、僧侶が一同に会して齋食をする建物である。食堂の実態については史料が乏しく、不明な点が多いが、布薩に代表される仏教儀礼や、年中行事などがおこなわれ、僧侶の日常的活動を支えると同時に儀礼空間でもあったという（吉川真司「古代の食堂」『律令国家史論集』塙書房、2010）。薬師寺食堂の造営年代に関しては不明だが、東塔の年代（730年）を手がかりにすると、奈良時代前半までには建てられたとみられる。

薬師寺本『薬師寺縁起』（以下『縁起』）によれば、「一、食堂一字九間四面、東屋、長十四丈、広五丈四尺五寸、柱高二丈五寸、前九間、後戸三間、左右脇門。」とあり、食堂の規模は桁行11間、梁行4間で、寄棟造、建物の大き

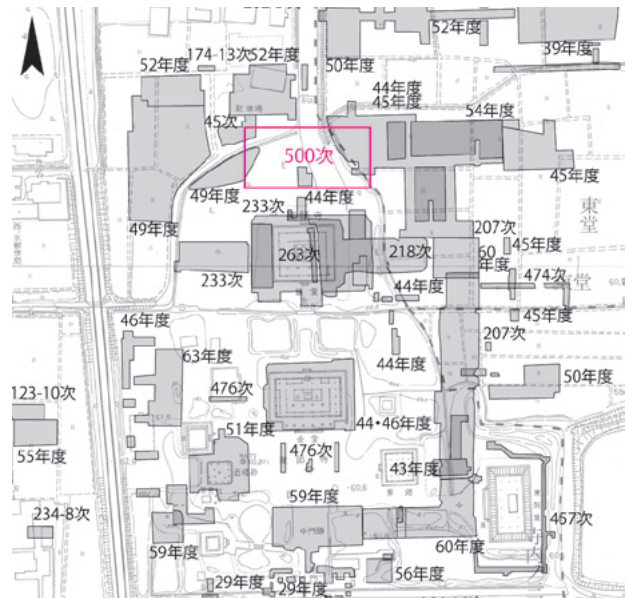


図229 第500次調査区位置図 1:3000

さは桁行140尺、梁行54尺5寸とある。また、扉口は正面に9つ、背面に3つ、左右には脇門が1つずつあったと記されている。この食堂は、天禄4年（973）に北方に隣接する十字廊より出火した火災により焼失した（『縁起』・『扶桑略記』）。その後、食堂は寛弘2年（1005）に再建されたことが『縁起』にみえ、保延6年（1140）に大江親通によって編まれた『七大寺巡礼私記』から、『縁起』と同じ桁行11間、梁行4間の瓦葺建物だったことがわかる。以後は食堂に関する文献史料はみあたらず、いつまで存続したかは不明だが、延宝2～4年（1674～1676）の作とされる『伽藍寺中并阿弥陀山之図』や元禄2年（1689）の伽藍絵図など、江戸時代の絵図には描かれておらず、代わりに食堂の位置には、南北の参道が設けられている。したがって、この頃までには廃絶していたと考えられる。なお、この南北の参道は、昭和44～49年度の発掘調査まで参道や生活用通路として踏襲されてきた。今回の調査でも、参道があった基壇中央部は基壇土の残存状況がよく、路面と考えられる固く締まった面も土層で観察できた。長年通路として利用されてきたため、後世の耕作などにともなう削平を免れたと考えられる。

3 検出遺構

基本層序

調査区内は1979年以後の整備のため、15～30cmの厚さで盛土が施され、これを除去すると旧表土が露出する。

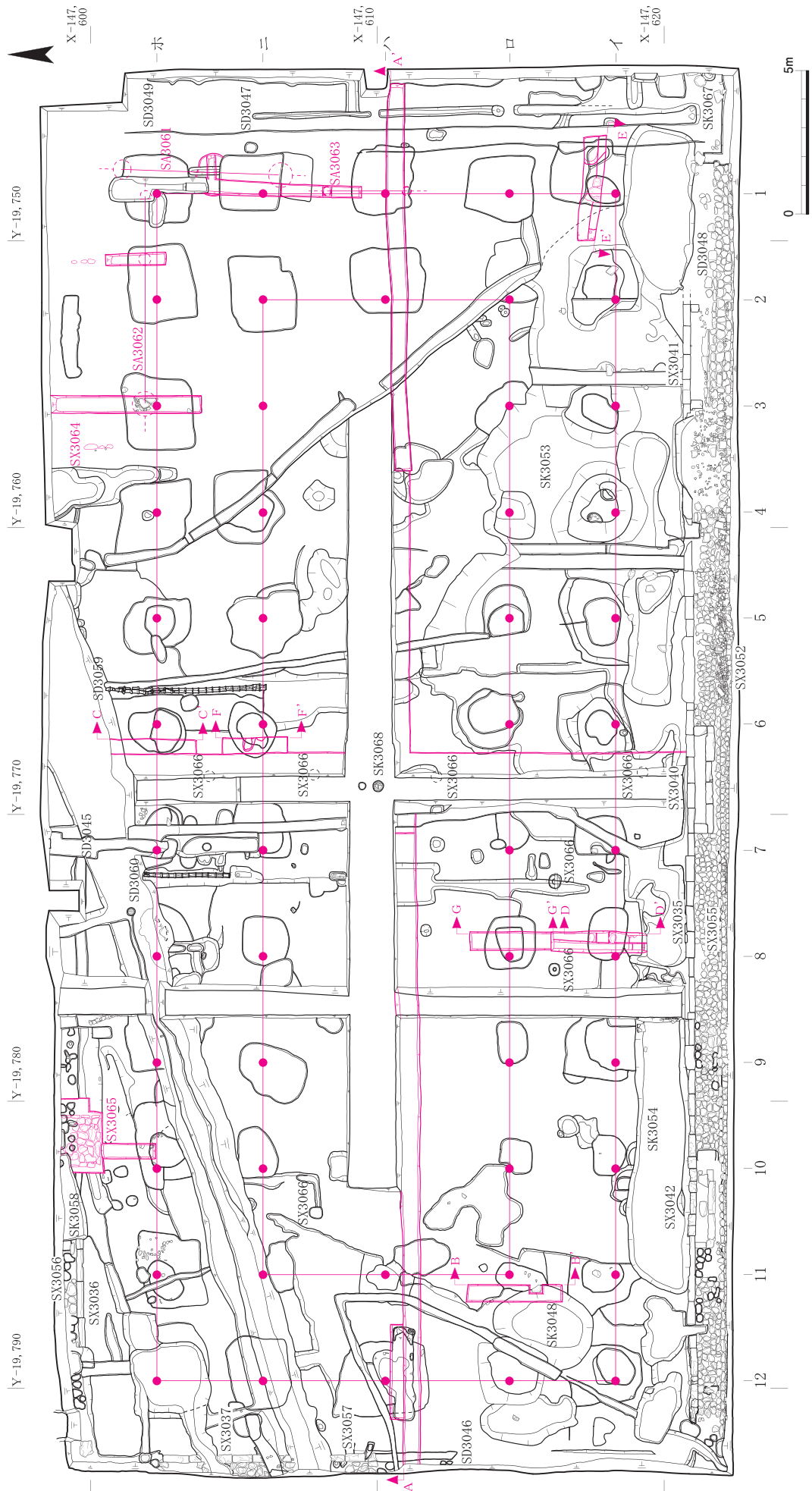


图230 第50次調査区遺構平面図 1:200

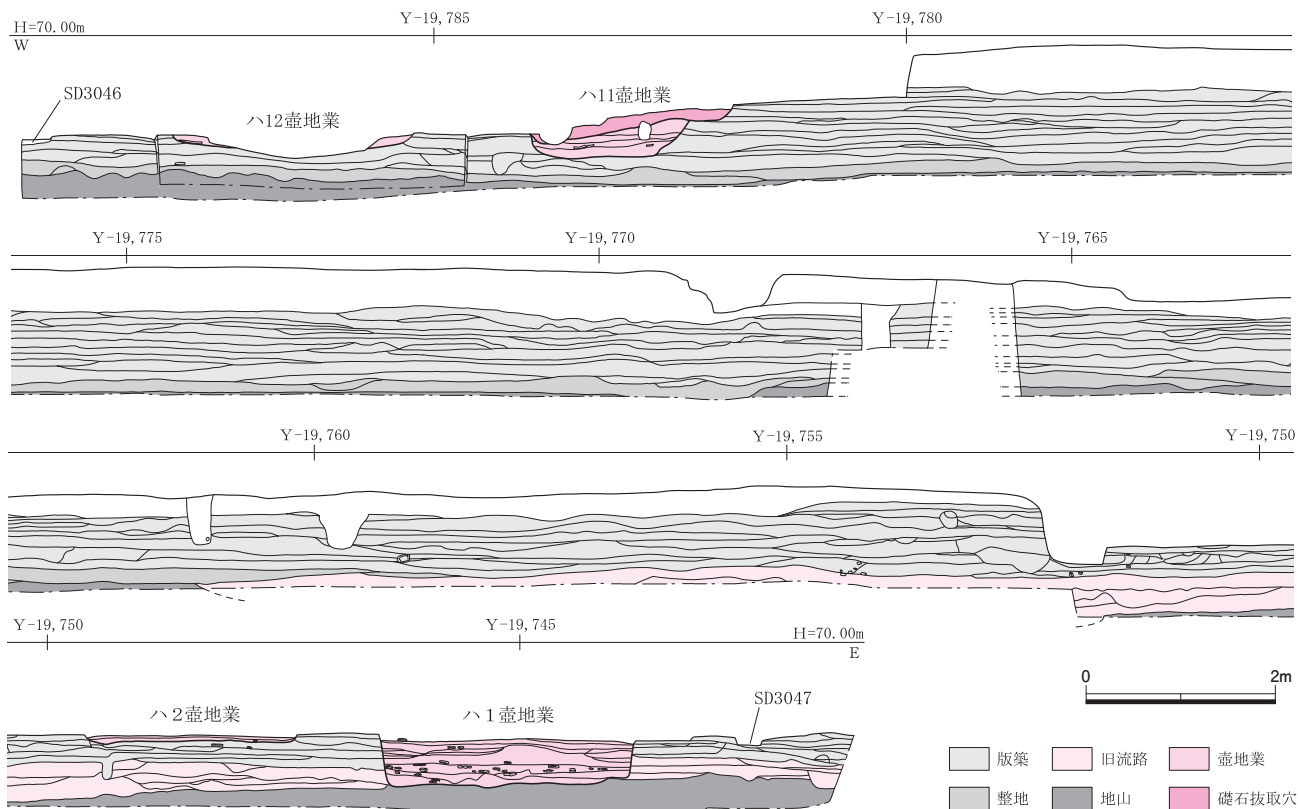


図231 調査区中央部東西断面図(図230A-A) 1:80

旧表土は、調査区中央部と東西端部とで異なり、中央部は南北通路の路面である。一方、東西端部は既往の調査区と一部重複するが、旧表土が残存する部分は基本的に耕土、もしくは腐植土となる。旧表土の厚さは20~50cm。これらを除いた上で食堂基壇土を検出した。厚さは10~80cm。今回の調査の主な遺構検出面は、この基壇土上面である。一方、食堂造営前の遺構は、基壇土の下の整地土上面で確認した。整地土は、黄褐色粘質土や褐灰色砂質土で、厚さは5~30cm、上面の標高は約59.80mである。この整地土は調査区内全体に広がり、少量ながら創建期の瓦を含む。このことから、周辺ではすでに薬師寺の整備が進んでいたことが分かる。地山は黒褐色粘土で、木片などの有機物を含む池沼状の堆積層。地山上面は、調査区西端で59.70m、東端で59.40mである。調査区東部や南辺部では、これを切り込む自然流路を確認し、その中には埴輪片や古墳時代の土器片を含む。

食堂に関わる遺構

食堂SB3050は桁行11間、梁行4間の東西棟礎石建物(図230)。礎石の据え付け、あるいは抜き取りにともなう遺構を主に基壇上で検出し、基壇外装として地覆石や地覆石抜取溝、階段の地覆石等を検出した。また、基壇南・西・北辺では石敷を、南辺では石敷の外側に石組雨落溝を検出した。

基壇 現地表面下30~80cmで検出した。南辺が大土坑SK3053・3054に、東辺および北辺も後世の耕作等によ

り大きく削平されている。基壇はもっとも残りのよい中央部で、整地土上面から約80cm遺存しており、標高は60.50m。基壇の平面規模は、基壇外装である地覆石や地覆石抜取溝の外側間で、東西約47.1m、南北21.6m。薬師寺の造営尺である1尺=29.6cm(『薬師寺報告』)を適用すると、基壇規模は東西159.1尺、南北73.0尺となる。

基壇は、整地土面に版築工法を用いて築成する。整地および整地土上の版築のうち数層は、基壇周辺の石敷下までおよぶ。そのため、調査区南端、西端では掘込地業の有無は確認できない。しかし、後述するように北端では整地土面に設けられた食堂造営前の石敷SX3065を版築の下で検出しており、少なくとも北辺に関しては基壇築成にともなう掘込地業はないとみてよい。一方、東端は地覆石抜取溝SD3047を境に、版築が西と東に向けて傾斜しており、それぞれ、食堂と東僧房に関わる掘込地業と考えることも可能である。このように明確な掘込地業とはいえないまでも、基壇縁辺部の一部は緩やかに掘り下げたのち、版築をおこなっている可能性がある。

版築は、1層が3~20cmの厚さをもち、残りのよいところで10層程度を確認した。版築は、基壇中心部では細かく、縁辺部にいくにつれ粗くなる。しかし、いくつかの層は広範囲でほぼ水平に施されており、一定の単位で高さを揃えながら、水平に基壇を築成したと考えられる。ただしいずれの層も堅固なものでなく、やや軟弱な印象をうける。版築土は、黄褐色砂や、灰白色粘質土、

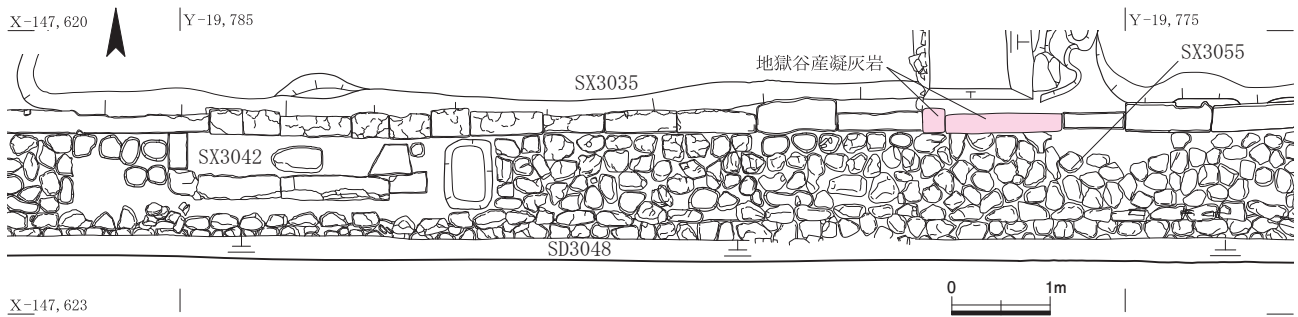


図232 基壇南面遺構平面図(1) 1:80 (右方が図234に接続)

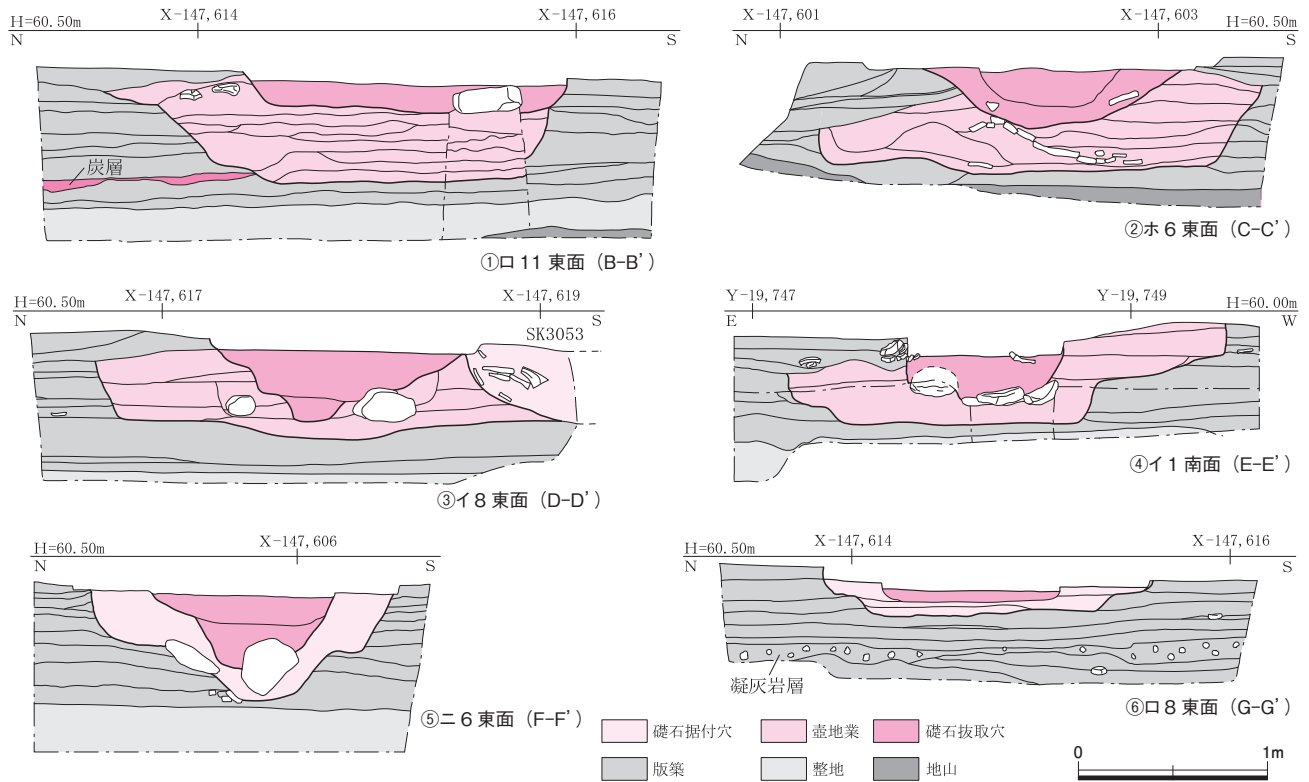


図233 壺地業および礎石据付穴断面図 1:40 (B-B'などは図230掲載の位置を示す)

淡黄色砂質土などからなり、なかには凝灰岩を粉砕したものを混ぜ込んだ凝灰岩層と称すべき層もあった。また、基壇東部では、版築の中に瓦を面的に敷き込んでいるところや、西部では炭層が広がることも確認できた。

壺地業 廂柱と東西両妻の身舎柱では、礎石の据え付けに際し、壺地業をおこなっている(図233①~④)。掘方は、一辺2.0~2.8mの隅丸方形で、深さ40~50cm。掘方には、粗砂と粘質土、また部分的に瓦片を入れながら層状に埋め固める。壺地業の掘込面が確認できる場所は限られるが、基壇版築層の途中から掘り込み、礎石を据えた後、さらに基壇を積み足している。また、根石を据え付ける際に掘り込んだと思われるものもある。なお、壺地業のなかに含まれる瓦は大半が平瓦だが、なかには軒瓦もあり、すべて奈良時代前半の薬師寺創建瓦である。

礎石据付穴 東西両妻の身舎柱を除く身舎柱位置では、原則的に壺地業はおこなっておらず、かわりに礎石据付

穴を検出した(図231)。礎石据付穴の大きさは、1.7~2.4mの円形から隅丸方形で、基壇上面から掘り込んでいる可能性がある。根石がない礎石据付穴の深さは、遺存する基壇上面から10~30cmと浅い。一方、根石をもつものは40~50cmと深い傾向にある。据付穴の埋土は、基壇土由来の土とみられ、層状の埋土などの明確な地業の痕跡は認められない。

礎石拔取穴 礎石はすべて抜き取られ、調査区内には残存しない。しかし、基壇が比較的良好に残っている中央部から西部にかけて、礎石拔取穴を検出した。大きさは径1.0~2.5mの不整円形で、深さは10~40cmである。一部は後述する基壇南辺の大土坑SK3054で壊されている。

地覆石 基壇の南面、北面西部、西面中央部で地覆石SX3035~3037を検出した。地覆石は、後述する2石を除いてすべて二上山産溶結凝灰岩製である。また、基壇北面中央付近、西面南半、東面では、地覆石の抜取溝SD3045~3047を検出した。地覆石は全体的に風化し

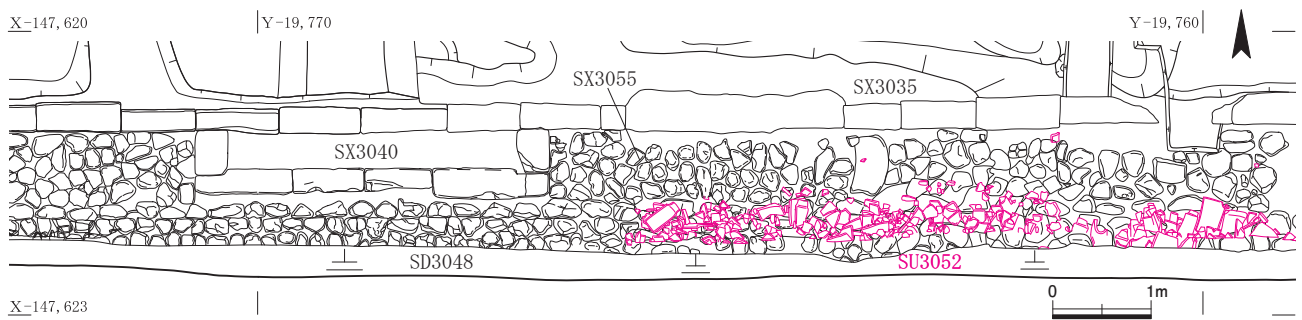


図234 基壇南面遺構平面図(2) 1:80 (左方が図232、右方が図236に接続)

ているものの、およそ当初の面を残している。大きさは長辺65~125cm、短辺18~35cm、厚さ5~18cmとばらつきがあるが、上面および基壇外面を揃えて据えられている。羽目石を設置するための仕口等は設けられていない。地覆石上面の標高は、基壇南面の西側で60.15m、東側では59.97mと東に向かって若干低くなる。地覆石は基壇から外周部にかけて整地・版築をした上に、据付穴を掘って据えられている。また、地覆石を据える際、下に瓦等を入れて高さを調整しているところもある。地覆石の据付痕跡は基本的には1時期分しかなく、据付穴の埋土が精良で炭化物等が混じらないことから、創建期のものと考えられる。また、再建にともなう大規模な改修の痕跡なども確認できない。ただし、基壇南面で2石のみ春日山地獄谷産の凝灰岩製地覆石があり(図232)、これに関しては、据え替えとみられる。なお、羽目石や葛石など、地覆石より上部の基壇外装を原位置で残すものはなかったものの、基壇南面と北面で地覆石の前面に風蝕した凝灰岩片が散乱している部分があった。凝灰岩は原形をとどめていないため、断定はできないが、転倒した羽目石の可能性はある。

階段 基壇南面で3ヵ所の階段、中央階段SX3040、東階段SX3041、西階段SX3042を確認した。食堂の桁行中央間および東西両端からそれぞれ2間目に相当する。SX3040は昭和44年度の調査でも検出されていた。いずれも二上山産凝灰岩製で、基壇地覆石を引き通した上で、コの字状に地覆石を突出させている。幅は階段地覆石外側間で東西約3.7m(12.5尺)、基壇地覆石外面から階段地覆石外面までの突出は約0.75mである。SX3041は地覆石の上に風化した凝灰岩が覆っており、踏石の一部が移動しつつ残存したと考えられる。SX3042では、東側の耳石地覆石が抜き取られていたが、引き通した基壇地覆石と階段地覆石の間にも凝灰岩が据えられていた。なお、基壇北面にも階段が想定されるが、後世の水路開削等を受けてその痕跡は確認できなかった。

『薬師寺報告』では、SX3040の出が0.75mであることから、踏面0.25mで、3段の階段と推定している。また、基壇の高さを、蹴上と踏面とが等しいとした場合、地覆



図235 西面地覆石SX3037と石敷SX3057(北から)

石の見付高0.1mを加えて約0.85mに復元している。後述するが、礎石はまったく残存しておらず、基壇の正確な高さは不明である。しかし、残存する基壇の最上面の標高が60.50mであること、根石の標高が60.10~60.20mであることから推測すれば、基壇の高さは少なくとも階段の出と同じ0.75m程度あったと考えても齟齬はない。

石敷 基壇南面、北面、西面で基壇地覆石の外側に沿って石敷SX3055~3057を検出した。南面石敷SX3055の遺存状態はよいが、北面石敷SX3056および西面石敷SX3057は後世の削平で、石敷がわずかに残るほか玉石の抜取穴が確認できるのみである。SX3055は、15~30cmの花崗岩・チャート・片麻岩・安山岩などを基壇地覆石と雨落溝との間に3・4列敷き並べる。地覆石外面から雨落溝北側石内側までの幅は東方で約0.75m、西方では0.80mで、わずかだが西方で広くなる。地覆石上面と地覆石外面に接する石敷との比高は3~10cm。また、SX3055の北端と南端では、4~8cmの高低差があり、雨落溝に向かって緩やかに低くなる。SX3056、SX3057は、石が30~40cmとSX3055よりも若干大きい。

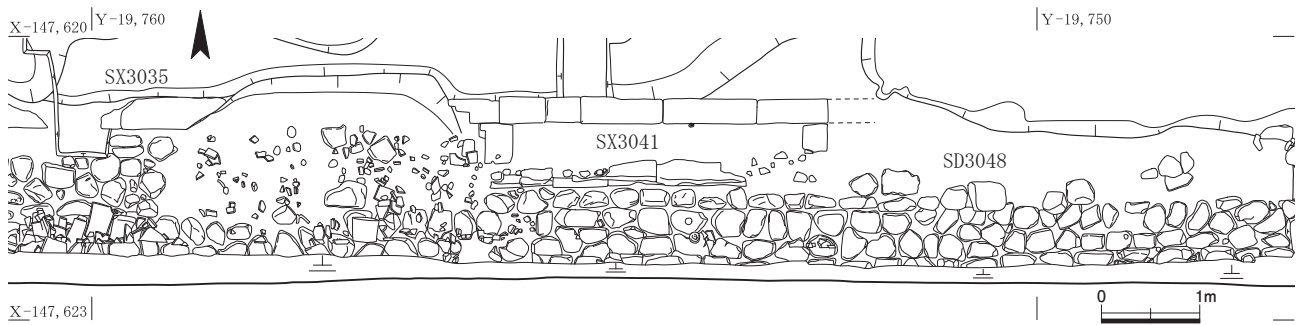


図236 基壇南面遺構平面図(3) 1:80 (左方が図234に接続)



図237 南面雨落溝SD3048東端部(東から)

雨落溝 基壇南面で石組雨落溝SD3048を検出した。SD3048は階段と石敷の外側に沿って構築されている。石材には花崗岩、チャート、片麻岩、安山岩などが用いられていた。後世に一部壊されているが、遺存状態はよく、東西約40mにわたって確認した(図237)。15~45cmの石を底石として2・3列敷き並べ、その両端に20~40cmのやや扁平な石を立てて側石とする。側石上面と底石との比高は4~9cm。東端部で両端の側石を検出しており、溝幅は、側石の内々で約0.5m。溝底上面の標高は西端で60.00m、東端で59.85mと、基壇外装の地覆石と同様に、西から東に向かってわずかに低くなる。また、東階段SX3041の正面では、SD3048内に30~50cm大の河原石が階段の幅とほぼ同じ長さで置かれていた。概ね上面が水平になるよう置かれていたが、いくつかは転倒している。これらは、階段前の雨落溝の溝幅を狭めるために意図的に置かれたものと考えられる。なお、雨落溝の埋土は灰色の粗砂であり、これが先述した石敷上面を覆っている。さらにその上にはごく薄く、焼土や炭をと



図238 瓦溜SU3052(北から)

もなう赤褐色粗砂が覆っていた。

また、基壇東面で雨落溝SD3049の西肩を検出した。SD3049は隣接する東僧房の西雨落溝と共有し、昭和44年度の調査でも検出している。SD3048と同じく石組と考えられるが、石は抜き取られていた。また昭和49年度調査では、北面西端部分や西面でも石組雨落溝を確認しているが、今回の調査では雨落溝直上に埋設管等が通るため、検出できなかった。

足場SX3066 基壇上面で検出した、径約0.3m、検出面からの深さ約40cmの柱穴。7基確認した。これらは壺地業や礎石据付穴の間に筋を揃えて並ぶ。柱穴は食堂の壺地業や礎石据付穴と重複しないため、いつの時期の足場かは断定できないが、埋土が淡黄色砂質土で基壇土由来の比較的精良な埋土であり、また瓦などの遺物を含まないことから、食堂創建時の足場と思われる。

瓦溜SU3052 南面中央階段SX3040と東階段SX3041の間で、雨落溝や石敷の上から、完形に近い軒瓦や丸・平瓦がまとまって出土した(図234・238)。これらは東西約8mにわたって折り重なり、屋根から落下した瓦の可能性が高い。出土した軒瓦は、いずれも平安時代中期のもので、再建時の食堂の屋根に葺かれていた瓦と考えられる。

食堂造営以前の遺構

掘立柱列SA3061~3063 調査区東北部で食堂造営以前のほぼ正方位にのる柱列を3条検出した。これらは基壇の下層にある。東西掘立柱列SA3062は瓦を含む整地土上

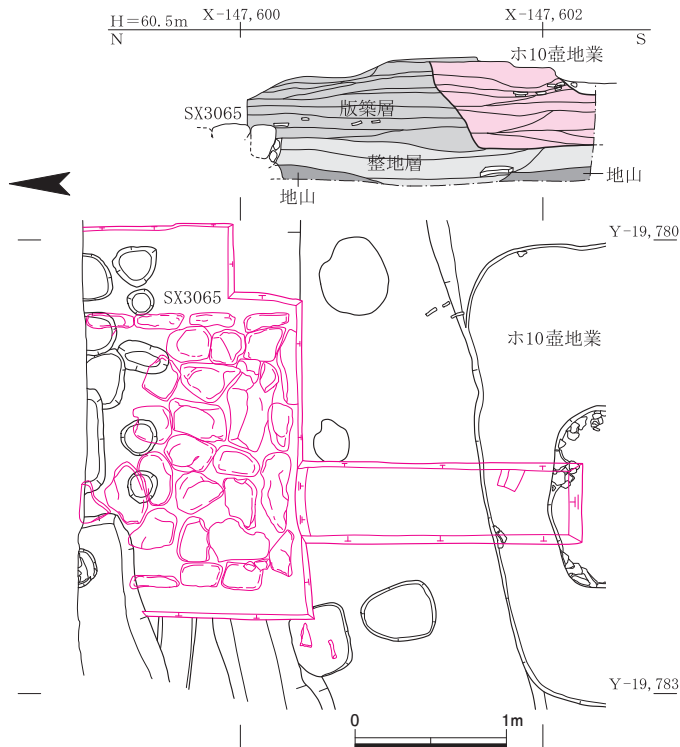


図239 石敷SX3065遺構図・断面図 1:50

面から掘り込まれ、壺地業に壊されている。柱掘方は径約0.6m、整地土上面からの深さは30cmで、少なくとも3間以上ある。柱間は2.1m（7尺）である。

SA3061はSA3062東端から0.6m東にある南北掘立柱列。整地土上面から掘り込まれ、壺地業に破壊される。柱掘方は径約1.2～1.4m、整地土上面からの深さ約20～40cm。2間分確認し、柱間は2.4m（8尺）。1基のみ基壇土が削平され、整地土が露出する面で平面を確認した。

SA3063はSA3061の西0.8mに平行する南北掘立柱列。柱掘方は約0.5m、整地土上面からの深さは30cm。1間分検出し、柱間は2.4m（8尺）である。なお、これらの掘立柱列は、建物や塀になる可能性もあるが、部分的に確認したのみで詳細は不明である。

石敷SX3065 調査区西北の北面基壇縁付近で確認した石敷（図239・240）。食堂柱位置ホ10の北方にあたる。東西1.6m、南北1.3mを確認した。北辺は調査区外まで延びる。西と東、南の3辺に見切石を並べ、その中に約40cmの玉石を敷き並べる。南辺の見切石は東西のものに比べて大きい。石敷の南辺は食堂基壇内部にまでおよび、基壇版築で覆われている。瓦を含む整地土を掘り込んで



図240 石敷SX3065（北西から）

掘えられているため、薬師寺に関する遺構と考えられるが、その性格や食堂との関連は不明である。

石列SX3064 基壇東北隅から西12mの位置で確認した。南北方向に3石並ぶ。基壇縁より内側にあり、基壇版築で覆われている。長さは約1m。石敷SX3065より約24m東方にあり、食堂基壇の中軸で折り返すとSX3065とほぼ相對する。このためSX3065と同じ性格をもつ一連の遺構の可能性があるが、やや南に位置する。

食堂廃絶後の遺構

大土坑SK3053 基壇南東部を破壊する大土坑。大きさは東西約22m、南北約9mと東西に長い。南面の地覆石を一部破壊するが、地覆石を土坑の南辺として掘り込む。深さは、残存基壇の上面からもっとも深い所で約50cmある。食堂SB3050の南側柱筋や入側柱筋の礎石位置にもおよび、側柱筋に施された壺地業が鳥状に突出する。奈良～鎌倉時代にかけての膨大な量の瓦や、8～13世紀にかけての土器類が出土した。

大土坑SK3054 基壇南西部を破壊する大土坑。基壇南面の地覆石を残し、土坑の南肩として利用したらしい。東西約14.4m、南北約2.1mと東西に長い溝状を呈する。基壇上面からの深さ約80cm。食堂SB3050南側柱の礎石抜

取穴を破壊する。瓦の出土量は、SK3053より若干少ないが、SK3054の東部では、大量の凝灰岩片が出土した。SK3053と同様の性格の遺構だろう。

土坑SK3048 SK3054西端の約2m北で検出した。径2.1～3.5mの不整円形で、深さは残存する基壇の上面から100cm。埋土に大量の瓦を含む。SK3053やSK3054と同様の性格の遺構と考えられる。最下部で13世紀の完形の瓦器椀が2点出土した。

土坑SK3067 調査区東南隅で検出した。土坑東半は調査区外となる。深さ50cm。埋土に炭や焼土を含む。東雨落溝SD3049を破壊する。ここから金銅製の垂木先金具が出土した。

土坑SK3068 食堂基壇のほぼ中心で検出した。径0.4m、深さ20cm。中には奈良～平安時代の瓦が大量に詰め込まれていた。

土坑SK3058 調査区西北隅から8m東で検出した。石敷SX3065の西端を破壊する。東西3.1m、深さ100cm以上。南端の一部分のみ検出し、大半は北側の調査区外に広がる。埋土は暗灰色粘土で、最下部に木材を敷く。東端には平瓦を立てて筒状にした枿が設けられていた。近世の水溜めであろう。

土管暗渠SD3059・3060 調査区中央の北寄りで南北方向の瓦製の土管暗渠を2条検出した。いずれも暗渠の両端が壊されているが、北に向けて緩やかに傾斜しており、南から北へ排水していたとわかる。土管は片側にソケットをもち、近世のものとみられる。SD3059は、土管が24本残存しており、長さ5.5m分を検出した。一方、SD3060は13本残存しており、長さ3.0m分を検出した。

(石田由紀子)

4 出土遺物

瓦磚類 本調査ではコンテナ2,600箱以上の膨大な量が出土した。瓦磚類には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅切瓦、鬘斗瓦、面土瓦、磚、土管などがあげられ、年代は奈良～明治時代までと幅広い。これらは現在も整理途中である。以下は特に重要な軒瓦を報告する(図241)。

1～10は軒丸瓦。1は外縁が凸線鋸歯文、外区が珠文の複弁八弁蓮華文で薬師寺2(6276Aa)型式。本薬師寺および薬師寺の創建瓦。1は大土坑SK3053出土だが、多くの細片が壺地業から出土した。2は同じく薬師寺

2型式だが、篋の彫り直しをおこなっている(6276Ab)。ハ1壺地業出土。3は外区素文の複弁八弁蓮華文で薬師寺6型式。版築層より出土。4は薬師寺3型式、小型で裳階用の軒丸瓦と考えられている。ハ1壺地業出土。1～4は奈良時代前半。5は複弁八弁蓮華文軒丸瓦の薬師寺39型式。瓦溜SU3052出土。平安時代中期。6は単弁蓮華文で弁数は17弁に復元できる。中房が八花形に突出しその周囲に蕊をめぐらすなど、薬師寺65・66型式に近似するが、弁は単弁で中房の蓮子が1+4である点や、外縁に珠文をもたない点が異なり、新形式。平安時代。7は外縁に輻射文をもつ単弁六弁蓮華文で薬師寺76型式。平安時代後期。瓦当径11cmほどの小型の瓦である。SK3053出土。8は単弁八弁蓮華文で、中房と弁区の間一条の圏線をもち、間弁は棒状で弁端は円頭である。外縁との間に一条の圏線がめぐり、圏線の内側を三角形の文様がめぐる。中房には蓮子を配していたようだが、焼成前に乱雑に削り取られている。新形式。平安時代。9は巴頭部先端がわずかに接し、巴尾部は一方のみ圏線に取り付く。これまで三巴左巻文とされていた薬師寺145型式とみられる。鎌倉時代前半。SK3053から多く出土し、丸瓦部まで完存するものも多い。10は巴頭部先端が尖り、巴の尾部は圏線に取り付かない。新形式。鎌倉時代。

11～18は軒平瓦。11・12は右偏行唐草文軒平瓦。11は薬師寺201(6641G)型式。本薬師寺および薬師寺の創建瓦。11は包含層出土だが、壺地業からも多数出土している。12は薬師寺202型式で、両脇区に鋸歯文を削り落とす6641Hb。版築層より下の整地土面から出土した。11・12は奈良時代前半。13は外区珠文の薬師寺218(6664O)型式。包含層出土。奈良時代前期～中期。14は外区圏線文の均整唐草文で薬師寺214(6663H)型式。包含層出土。奈良時代中期。15は上外区に珠文、下外区に線鋸歯文を配す均整唐草文の薬師寺245型式。16は外区素文の薬師寺254型式。いずれも瓦溜SU3052出土。15・16は平安時代中期。17は左巻三巴文を均等に5個配する薬師寺303型式。顎部が平瓦部から剥離する資料があり、顎貼り付け技法とわかる。SK3053出土。鎌倉時代前半。18は薬師寺305型式で「薬師寺仁治壬寅」の年号銘(1242年)をもつ。SK3048出土。鎌倉時代。

本調査で出土した瓦は、奈良時代前半、平安時代、鎌

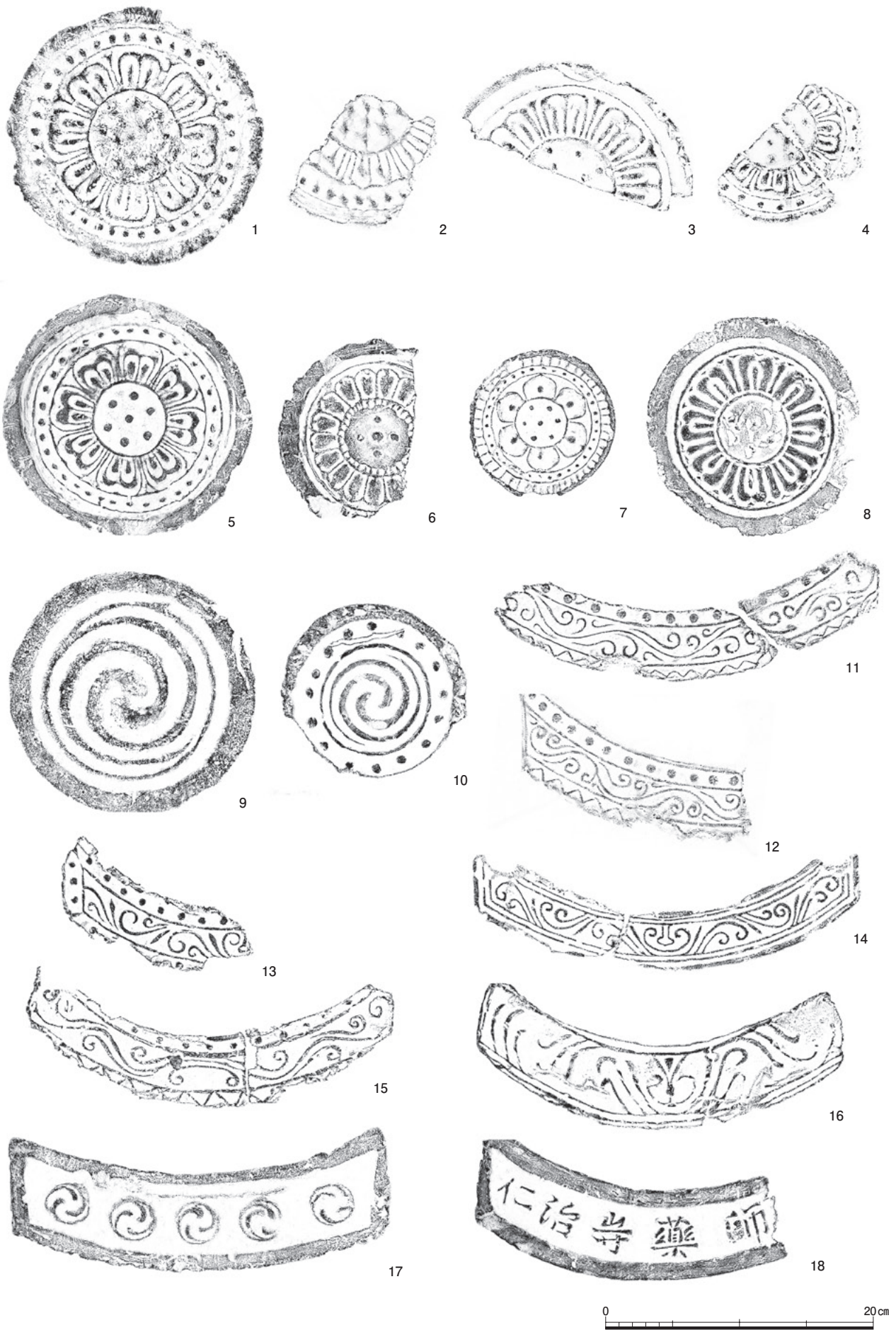


図241 第500次調査出土軒瓦 1 : 4

倉時代が中心で、出土する場所や遺構にも一定の傾向がみられる。ここでは、食堂の変遷を考える上で重要と考えられる壺地業、整地土や版築層、SU3052、SK3053・3054・3048から出土した軒瓦について検討を加える。

壺地業からは、軒丸瓦では薬師寺2 (6276Aa・Ab) 型式、薬師寺3 (6276E) 型式、軒平瓦では薬師寺201 (6641G) 型式、薬師寺203 (6641I) が出土している。また、版築層からは薬師寺6型式、整地土からは薬師寺202 (6641Hb) 型式が出土した。これらはいずれも薬師寺創建瓦であり、奈良時代前半の瓦である。奈良時代前半以外の瓦は壺地業や版築層、整地土からは出土しておらず、食堂造営を考えるうえで大きな手がかりとなる。

瓦溜SU3052は、食堂の屋根から落下した瓦の可能性が高い。ここからは軒丸瓦は薬師寺39型式7点、軒平瓦は薬師寺245型式が3点、254型式が9点出土した。SU3052からは他の軒瓦は出土しておらず、薬師寺39型式-薬師寺254・545型式が食堂所用瓦の組みあわせとみてよい。いずれも平安時代中期に位置づけられ、寛弘2年(1005)に再建された食堂のものと考えられる。

SK3053・3054・3048からは本薬師寺創建瓦から鎌倉時代までの軒瓦が出土している。現時点では鎌倉時代のものがもっとも新しく、SK3048から出土した18の年号銘も参照できる。中でも薬師寺145型式(9)、303型式(17)の出土が目立ち、いずれも完形品が多い点で共通する。両者は時期的にも近接するとみられ、文様からも組み合わせ可能性が高い。ただしSK3053からは、7のような裳階用とみられる小型瓦も出土しており、食堂以外の建物の瓦も含むとみられる。したがって、薬師寺145型式と薬師寺303型式が組み合わせるとしても、どの建物に用いられていたかは不明である。

(川畑 純・石田)

土器・土製品 奈良時代の須恵器・土師器・奈良三彩、平安時代の灰釉陶器、中近世の土師器皿、瓦器椀、瓦質土器、赤膚焼を含む近世陶磁器、印判染付など近代遺構の陶磁器などが出土した。古代のものは少量で、13世紀以降のものが中心である。遺構からの出土は、SK3053から比較的まとまって土器が出土したものの、整理箱1箱程度であり、瓦の出土量からみればきわめて少ないといわざるをえない。以下、食堂の変遷を考える上で重要な資料を中心に述べる(図242)。

1は奈良時代の土器で、基壇の壺地業から出土した須

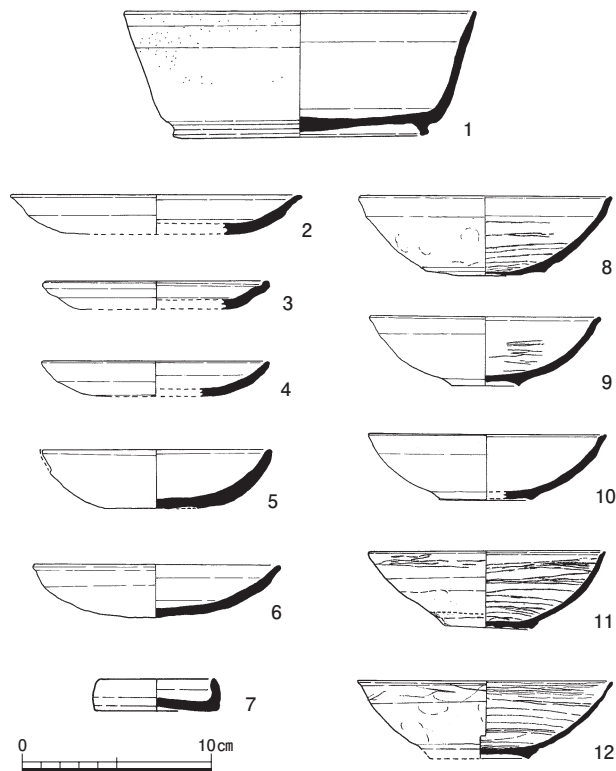


図242 第500次調査出土土器 1 : 4

恵器杯B。ほぼ完形に復する。青灰色の胎土で、陶邑窯産であろう。法量と高台の付き方からみて、奈良時代前半として矛盾はない。この他にも壺地業からは奈良時代の須恵器、土師器が出土しているが、いずれも小片かつ少量である。また、奈良三彩の小片も2点出土した。

2~12は中世の土器。SX3052から、瓦器片と土師器皿が出土した。2は土師器小皿。口縁部外面直下に強く1段ナデを施し、口縁端部は細い。底部は指オサエの痕跡が残る。胎土は淡褐色。3は「て」の字状口縁の土師器小皿。器壁は厚く、底部は丸く、口縁端部は丸く巻き込む。焼成は比較的堅緻である。瓦器は小片で、年代をはかりかねるが、土師器皿は11世紀末~12世紀頃の様相を呈し、食堂が機能していた時期のものであろう。

SK3053は、奈良時代や平安時代のものを若干含むが、出土した瓦器椀は13世紀後半~14世紀のものが主体である。4~6は土師器皿。口縁部直下を1段ナデする。7は瓦器小皿。口縁部が直角に立つが、角は丸みを帯びる。8~10は瓦器椀。器壁が薄く、指オサエの痕跡が明瞭に残り、高台は矮小である。

土坑SK3048らは完形の瓦器椀(11・12)が出土した。

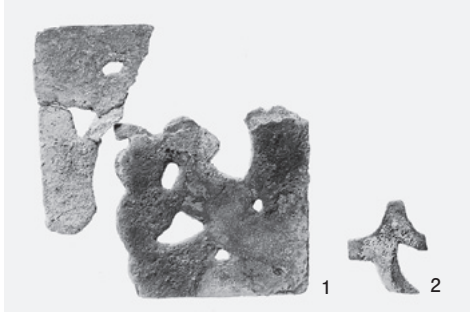


図243 第500次調査出土垂木先金具 1 : 4

大土坑SK3053と近い時期に比定できる。

食堂基壇を覆う包含層などからは、瓦質土器、染付、灯明皿の土師器皿など近世・近代の陶磁器とともに、赤膚焼の印を押す陶器や窯道具の匣鉢などが出土した。赤膚焼は現在でも薬師寺の近隣に開窯しており、窯場から出た廃棄物が混入したのであろう。(神野 恵)

金属製品 金銅製の垂木先金具が3点(うち2点は同一個体)、鉄角釘、鉄鏝などが出土した。鉄釘や鉄鏝などは、表土や包含層からの出土である。

図243は金銅製垂木先金具。1は2点で構成されるもので、約14cm四方の方形に復元できる。透彫によって文様を彫るが線刻等はみられない。蛍光X線分析によって表面から金が検出されており、鍍金されていたと考えられる。2は、約4cmの断片。全体形は不明だが、1の文様とは異なる。これらはすべて、土坑SK3067から出土した。

石製品 花崗岩製の手水鉢と思しきもの1点、砥石が3点出土した。いずれも表土あるいは包含層から出土した。

銭貨 表土から寛永通宝が1点出土した。(芝康次郎)

5 まとめ

建物の規模 食堂の規模は、『薬師寺報告』では、桁行11間、梁行4間で、柱間寸法は、桁行は中央間を15尺、それ以外は12.5尺等間とし、総長を140尺、梁行は身舎2間を14.5尺、廂12.5尺として総長54尺に復元しており、『縁起』(長14丈、広5丈4尺5寸)とほぼ一致するとしていた。今回の調査により建物の柱間数は、桁行11間、梁行4間と確定したが、礎石が1石も遺存せず、礎石抜取穴や壺地業の規模も大きいため、正確な建物規模の確定は困難である。ただし、基壇の規模、南面の階段、礎石抜取穴、雨落溝など今回検出した遺構からいくつか手が

かりはある。

まず、基壇の規模は、地覆石や地覆石の抜取溝外側間から、東西47.1m(159.1尺)、南北21.6m(73.0尺)と確定した。ただし、南面中央階段から得られる南北中軸線から東は23.3m、西は23.8mと西のほうが0.5m程度広い。次に、基壇南面で検出した3ヵ所の階段の幅は、耳石地覆石外側間でいずれも3.7m(12.5尺)を測る。東階段の耳石地覆石東縁から西階段の耳石地覆石西縁までの距離は33.0m(111.6尺)で、中央階段は正しく中央に位置する。また、今回の調査では南面の石組雨落溝と東面の雨落溝抜取穴の西端を検出したが、北雨落溝と西雨落溝は既往の調査で確認している。南北雨落溝心間間の距離は、23.9m(80.7尺)、東西雨落溝心間間の距離は、東雨落溝の遺構が明確でないため、南北中軸線より西雨落溝心までの距離25.1mを折り返し、東西を50.2m(170尺)に復元する。以上が遺構から得られた食堂の規模に関する情報である。

この中で、特に注目できるのは階段である。先述したように、東西階段の耳石地覆石外縁間の距離は33.0m(111.6尺)である。南面階段は東西両端からそれぞれ2間目にあり、この間に9間分の柱が配される。33.0mを9間で割ると3.7mとなり、階段の幅3.7m(12.5尺)にほぼ一致する。したがって、検出遺構から身舎桁行9間が3.7m(12.5尺)等間の可能性が指摘できる。廂の柱間寸法に関しては、遺構から明確な根拠はないが、ひとまず3.7m(12.5尺)として検討する。この場合、食堂の桁行全長は3.7m(12.5尺)等間で40.7m(137.5尺)となる。このとき、基壇の出は、南北中軸線から折り返した場合、東は3.0m(10.0尺)、西は3.5m(11.8尺)となり、西側柱から西雨落溝心までの距離(軒の出)は、4.8m(16.1尺)と算出される。この軒の出の数値を梁行方向にも適用すると、建物の梁行総長は14.3m(48.3尺)となり、身舎梁行2間が3.5m(11.8尺)と算出される。しかし、この廂の柱間寸法は桁行、梁行とも同様であるから身舎梁行の柱間寸法では、梁行方向の礎石抜取穴の位置とは合致せず、遺構と齟齬が生じる。礎石抜取穴からみても、身舎梁行は最低3.8m(13尺)必要である。

一方、『薬師寺報告』の復元案をもとにすると、西面の軒の出は4.4m(14.9尺)、南北の軒の出は4.0m(13.3尺)となる。この場合、雨落溝までの距離は桁行と梁行で

0.4mほど異なるが、雨落溝の内々の幅0.5mには収まる。したがって、梁行の柱間はひとまず『薬師寺報告』にならない、身舎14.5尺、廂12.5尺と考えておきたい。

以上から、『薬師寺報告』の復元案は、雨落溝の位置から考えられる案や『縁起』とも大きな矛盾はない。これを復原案Aとする。ただし、この場合、階段幅と桁行中央間の柱間寸法が合わず、東西の階段も柱間とあわないなど問題が生じる。そこで考えられるのは、桁行を階段にあわせて12.5尺等間とし、梁行の柱間寸法は仮に『薬師寺報告』にならう案である。これを復原案Bとする。この場合、東西と南北とでは雨落溝から廂柱までの距離が異なってくる。したがって、雨落溝から廂柱までの距離が平側よりも長い妻側では、石敷に雨水が垂下すると想定せざるをえない。このように、いずれの柱配置も遺構と完全に整合しない。今後、東西僧房や十字廊の取り合い等も含め再度検討する必要がある。

古代寺院の食堂に関しては、資財帳などの文献資料から知られるものと、発掘調査であきらかになった遺構とがある（奈文研『薬師寺—旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報Ⅰ—』、2013）。その中で、薬師寺食堂は東大寺、大安寺に次ぐ大きさとしていたが、そのことを発掘調査からも確認した。また、雨落溝の位置から判明した軒の出の長さから、食堂は柱上に手先をもつ組物を備えた建物だったと想定できる。組物は金堂や講堂、塔のような三手先組物を想定することも可能であり、食堂はこれまで考えられてきた以上に格の高い建物であった可能性が高いことが判明した。

食堂の造営と造営以前の様相 基壇版築や壺地業から出土した土器や瓦の年代は、いずれも8世紀前半のもので、食堂の造営開始が遅くとも奈良時代前半と確定できた。また基壇版築より下層で、地山（池沼堆積層）を埋め立てて平坦にする整地が調査区全域に施されていることを確認した。この整地には瓦片が含まれ、薬師寺の伽藍造営や整備が進んでいたことがわかる。この整地を掘り込んで石敷SX3065や石列SX3064を設けており、食堂造営以前の一時期は、この整地土面が地表面だったとみられる。また、同じ面から掘立柱列SA3061～3063が切り込む。基壇版築より下層にあるため部分的に確認したのみだが、これらは建物や塀になる可能性がある。このように、薬師寺伽藍が整備されていく過程で、食堂造営前に

なんらかの施設が建てられていたことが判明した。

基壇築成の工程 食堂の基壇築成の工程は主として断面の観察から、以下のように復元できる。①先述した整地の上に、版築で基壇を築成する（1次版築）、②廂柱および身舎の東西両妻の礎石位置のみ大型の掘方を掘り、内部を版築で埋め戻す壺地業をおこなう。③壺地業の版築の途中で根石を入れ、上に礎石を据え付け、さらに壺地業内の版築をおこなう。④基壇上面まで土を積む（2次版築）。④妻以外の身舎の礎石位置に礎石据付穴を掘り、礎石を据え付ける。これらの工程は複雑だが、壺地業や基壇版築に含まれる瓦はすべて薬師寺創建期のもので、一連の工程である。同様の工法は、薬師寺中門でも確認されている一方、講堂や金堂などは壺地業をおこなわず、基壇築成の工程も建物によって違いがある。その理由は不明であるが、建物の格、工人集団の技術、時期差等が反映している可能性がある。

食堂の再建 礎石据付穴や礎石抜取穴に重複はなく、地覆石も一部据え直されているものの、全面的な改修は認められなかった。石敷や雨落溝にも顕著な改修は認められず、層状に積まれた精良な土の上に構築されており、奈良時代建立当初の形態をとどめるとみられる。また、火災にともなう明確な焼土層もない。しかし、食堂の屋根に葺かれた瓦が落下したとみられる瓦溜SU3052出土瓦が平安時代中期のものでまともまっていることから、食堂が天禄4年（973）の火災後、再建されたことは確実である。したがって天禄の火災後には清掃がなされ、寛弘2年（1005）に再建された食堂は創建時の規模や礎石位置を踏襲して建てられたとみられる。

食堂の廃絶 基壇を壊す大土坑SK3053・3054・3048出土土器は、古代から中世まで幅広いが、その下限は13世紀末で、それまでに食堂が廃絶したことが確実である。また、先述したSU3052出土瓦は平安中期のもので、一括性が高い。瓦は屋根に葺かれた後、長期間使用されるので、瓦の年代が直接廃絶年代とはいえないが、SU3052のなかに後世の補修瓦が含まないことは注目できる。さらにSU3052下層からは11世紀末～12世紀頃の土師器皿が出土した。この土器が食堂の屋根から瓦が落下する直前に廃棄されたと考えれば、食堂の廃絶は12世紀代であった可能性が高い。（石田）